

# 美学美術史学科の三十年

武笠 朗

美学美術史学科は本年度（平成二十七年）創設三十周年を迎え、十月八日にそれを記念する式典が常磐祭（大学祭）開催中の新校舎創立二〇周年記念館にて行なわれた。多くの卒業生、在職教員が参集し思い出話に花が咲いた。また、創設と同時に創刊した本誌『美学美術史学』も、晴れて三十号を迎えた。美学美術史学科の三十年と本誌三十号を記念して、ここにごく簡単ではあるが、本学科及び博物館学課程と本誌の歴史をまとめてみたい。あわせて本学科専任教員の名前も記して記憶にとどめたい。<sup>1</sup>

美学美術史学科（以下美々ともいう）の創設は昭和六十年（一九八五）四月のことで、実践女子大学の日野校地全面移転の初年度であった。本学科の濫觴は、本学博物館学課程（以下博学課程、博学ともいう）の創設に遡る。<sup>2</sup>それは昭和四十二年（一九六七）四月のことで、図書館学課程とともに開講された。<sup>3</sup>最初期は、国文学科三条西公正教授を主任として始まったが、昭和四十五年（一九七〇）に本学科創設の立役者たる松原三郎氏が本学教授に着任し、美術史を中心とする課程へとシフトしていったようである。松原氏は昭和五十年（一九七五）から同課程の主任となったが、西洋美術史の坂崎坦氏とともに開設時より非常勤講師として本課程に関わっていた。

その後、昭和五十六年（一九八一）に島田紀夫氏が博学課程に着任し、この二人によって美学美術史学科の創設が準備された。<sup>4</sup>そして、昭和六十年四月、新たに仲町啓子氏を迎えて美学美術史学科は創立したのであった。募集人員は一〇〇名、初年度は一一七名の入学者があったという。昭和六十三年（一九八八）までに阿部幸夫氏、西田秀穂氏、大原まゆみ氏、小林宏光氏、佐藤綾子氏、宮次男氏、三隅治雄氏が順次加わり、創立期の専任メンバーが出そろったことになった。<sup>5</sup>日本、東洋、西洋美術史各二名、美学一名、芸能史一名の人員構成は以後長らく変わらなかった。学科創設の趣意は、『実践だより』に載る学科内容の紹介記事によれば、「芸術の歴史的な流れを学問的にたどりながら、広く美的・芸術的感受性を高め」「情操に富み人間性豊かな女性を育成することを目指している」とし、「文化や芸術を通して国際的相互理解に寄与しうる女性を育成したい」ともある。<sup>6</sup>また美学・美術史のみならず、民俗芸能を諸芸術のルートツとしてカリキュラムの柱に据え重視していることも特徴であった。初代学科主任は松原氏、以後西田氏、宮氏、末永照和氏、島田氏と連なる。美々創設後は、美々学科主任のみが博学課程主任を兼任することとなって他は博学課程から離れたが、実質美々の専任教員が課程運営に密接に関わる状態で今に至っている。

学科発足と共に『美学美術史学』は創刊した。創設年度末の昭和六十一年（一九八六）三月のことであった。初代紀要編集委員は仲町氏であったという。学科研究室に実践美学美術史学会を設け、その機関誌として本誌を年一回刊行することとした。松原氏による発刊の辞によれば、美学美術史学研究の発展に資することともに、研究室発行の雑誌として「学科所属の学生の教育資料」ともすることを目的としての発刊という。創刊当初の判型はA5であったが、平成十一年（一九九九）の第十四号よりA4に拡大された。また平成十三年（二〇〇一）の第十六号から本誌の編集委員会及びその規定が設けられ、掲載論文の査読が行なわれるようになり、平成十七年（二〇〇八）の第二十号に際して本誌への投稿規定が定められ、研究誌としての厳格性を増して今に至っている。

美々創設から七年後の平成四年（一九九二）四月、本学大学院文学研究科に美術史学専攻修士課程が設置された。初年度の入学者は五名であった。美術史学専攻の大学院は当初より人気が高く、これまでに多くの修了生を輩出してきた。美術館・博物館に学芸員として就職した者も少なくなく、それなりの社会的役割を果たしてきたものと思われる。平成二十三年（二〇一一）には、要望が強かった博士後期課程が増設され、博士課程（前期・後期）と名称変更して今に至っている。

一方学部の方は、小規模な更新を行なうものの、美学・美術史、芸史を中心とするカリキュラムの基本方針に大きな変更はなかったが、時代の要請に因應するべくいくつかの大きな更新を行なってきた。まず平成十八年（二〇〇六）度入学生から、美術の教員免許取得が可能となった。美術実技の専任教員二名を新規採用し、新たに実技棟が建てられ、絵画及びデザインの授業を設け、それを履修することによって美術の中

学校・高等学校教諭一種免許状を取得できることとなった。父母からの要望の強い資格取得だが、それまで美々では学芸員と司書資格のみで、他学部他学科のほとんどで取得可能な教職は取得できなかった。その問題を解消すると同時に、学科カリキュラムとしても新たに実技科目を取り込んでの刷新が図られた。現在まで、延べ八十四名の資格取得者を出し、五名が教職に就いている。

その一方で、平成二十五年（二〇一三）三月の田中英機教授の退職をもって、開学以来カリキュラムの柱の一つであった芸能史（民俗芸能、古典芸能）が閉講となった。入学定員削減に伴う人員削減による事態とはいえ、長年の人気講座の閉講は大いに惜しまれるところであった。田中教授退職年度の平成二十四年（二〇一二）六月三十日に香雪記念館で行なわれた、田中教授監修本学科主催の公開講座「琉球芸能江戸上り―沖縄古典芸能の歴史を探る―」（人間国宝・照喜名朝一氏の実演他）の大盛況ぶり（参加者二二七名）は思い出深い。平成二十三年度からは入学定員が九十名となっている。

平成十一年（一九九九）五月、日野大坂上校地の香雪記念館に香雪記念資料館（以下香雪ともいう）が開館した<sup>10</sup>。平成十六年（二〇〇四）九月には東京都より博物館法に基づく博物館相当施設の認定を受けた。その前身は、渋谷校地に昭和五十五年（一九八〇）に設けられた美術資料展示室に遡る。博物館学課程の実習用に、実物の鑑賞とその展示・保管のための資料室として設けられた。大学の移転とともに日野に移り、本館二階に日本・東洋美術展示室として、美々の実習の場も兼ねて存続した。その収集品を母体として資料館は開館した。展示室設置以来に至るまで、香雪と美々、博学との関係は深い。香雪の初代館長は平成十四年（二〇〇二）着任の島田氏、次いで仲町氏、宮崎法子氏、そして仲町

啓子氏が再登板して今に到っている。また、平成十五年（二〇〇三）から、博学課程の助手・助教として香雪の学芸員が置かれている。渋谷校地に移転して、創立二二〇周年記念館一階に二つの展示室を有する。近時日本の近世・近代の女性画家の作品を収集して全国的にも注目されている。

平成二十六年（二〇一四）四月、美学美術史学科・博物館学課程は渋谷校地に移転した。博学課程としては渋谷復帰となる。移転前の予想通り、美術館博物館へのアクセスが大きく改善されて、実地見学の授業が容易になったことは意義深い。移転初年度は、渋谷という新しい環境や新築の校舎に不慣れで戸惑うことが多かったが、三十周年の本年度は徐々に落ち着き、未来に向けて新しい一歩を踏み出しつつある。来年度（平成二十八年度）四年生から、実技を中心とする卒論ゼミ（絵画ゼミ、デザインゼミ）が始まる。これは、創立以来のカリキュラムの基本方針から大きく踏み出す大改革である。時代の要請、学生の質、性格の変容を受けての改革である。今後も学生や社会のニーズに応じて、かといってそれに過剰に反応することなく、創立当初の理念に立ち返りつつ、美術のすばらしさとそれに向き合うことの喜びを、真摯に学生に伝えていくべきであろう。

## 註

1 本稿をなすに当たり多くを次の文献に拠った。『実践女子学園一〇〇年史』実践女子学園、二〇〇一年三月。

2 博学課程の歩みについては次を参照した。松原三郎「本学博物館学講座二〇年のあゆみ」『MUSEOLOGY』六〔開講二十周年記念号〕実践女子

大学博物館学講座、一九八七年四月。「博物館学課程三十年の歩み」『MUSEOLOGY』一六〔開講三十周年記念号〕実践女子大学博物館学課程、一九九七年四月。なお、博学課程の機関誌『MUSEOLOGY』は昭和五十七年（一九八二）四月に創刊した。

3 美々創設の頃まで両課程はセットで、図書館学・博物館学課程（通称図博）であった。

4 大原まゆみ氏によれば、島田助教（当時）は学科創立の「陰の主役」であったという。大原まゆみ「学科紀要とともに」『美学美術史学』一（二）一九九七年七月。

5 以上の各氏は、昭和五十九年（一九八四）十二月の設置認可時の資格審査で合格となっており、まさに設立当初のメンバーである。

6 『実践だより』四一、一九八五年。『実践女子学園一〇〇年史』所収。

7 ただし、美々創立後数年は、松原、島田両氏は博学課程兼任であったという。

8 大原前掲論考（注4）。

9 松原三郎「発刊について」『美学美術史学』創刊号、一九八六年三月。

10 香雪記念資料館の歴史については次の論考を参照した。愛甲晴美「調査報告」実践女子学園香雪記念資料館の成り立ちについて」『実践女子学園香雪記念資料館館報』二（二〇〇五年三月）。

美学美術史学科歴代専任教員一覧

歴代専任教員（教授、助教授・准教授、専任講師、助手・助教〔博物館学課程を含む〕の在職期間及び主任在任期間を記した。着任順。着任は四月一日、退任は三月三十一日。

松原 三郎	名誉教授	(一九七〇) 一九八五～一九八八
島田 紀夫	名誉教授	(一九八一) 一九八五～二〇〇六
仲町 啓子	現職	一九八五～主任二〇〇一～二〇〇四
阿部 幸夫		一九八五～二〇〇〇
西田 秀穂		一九八六～一九九三 主任一九八八～一九九三
大原まゆみ		一九八六～一九九七
宮 次男		一九八七～一九九四・二・二〇没
小林 宏光		主任一九九三～一九九四
佐藤 綾子		一九八七～一九九五
		(一九八七～一九九五) (二〇〇四)
		※生活文化学科へ異動
三隅 治雄		一九八八～一九九八
上原 昭一		一九九〇～一九九七 二〇一〇没
末永 照和		一九九二～二〇〇二
降旗 芳彦	現職	主任一九九四～一九九七、二〇〇〇～二〇〇一
		(一九九一) 一九九三) ※一般教育課程から異動
赤沢 英二		一九九五～二〇〇〇 二〇一二没
宮崎 法子	現職	一九九五～主任二〇〇四～二〇〇七
武笠 朗	現職	一九九七～主任二〇〇七～二〇一〇
片桐 頼継		一九九七～二〇〇六・一〇・一五没

西角井正大		一九九八～二〇〇三
児島 薫	現職	二〇〇〇～主任二〇一二～二〇一四
椎原 伸博	現職	二〇〇二～主任二〇一四～現在
田中 英機		二〇〇三～二〇一三
六人部昭典	現職	二〇〇六～主任二〇一〇～二〇一二
有元 容子		二〇〇六～二〇一二
酒井 正		二〇〇六～二〇一一
駒田重紀子	現職	二〇〇八～
下山 肇	現職	二〇一一～
織田 涼子	現職	二〇一二～

助手・助教

木内真由美		一九九四～一九九九
玉川 潤子		一九九九～二〇〇二
濱住 真由		二〇〇二～二〇〇五
小倉絵里子		二〇〇五～二〇〇九
佐藤 美子		二〇〇九～二〇一三
中村 友代	現職	二〇一三～

博物館学課程助手・助教

愛甲 晴美		二〇〇三～二〇〇六
山盛 弥生		二〇〇六～二〇一一
太田 佳鈴	現職	二〇一一～